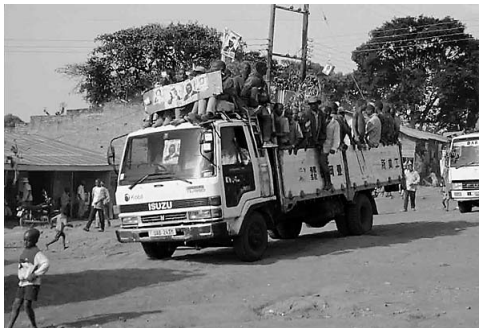


**写真 3　県評議員の「選挙宣伝カー」に満載の支持者たち（県庁の町で）**

が「まるでヤギを屠殺するように」殺された．かれらに親しみやすいかたちに書き直された政治劇．そこに書き込まれた人間どうしの葛藤や嫉妬，憎悪，それにもとづく抗争などが，かれらの社会の現実に飛び火しても不思議ではない．選挙の熱狂のこうした側面をどう考えればいいのかは，私にはまだわからない．ただ私が注目したいのは，人びとは現実の地方政治のもとでかれらの日常がどう変わるかより，選挙にまつわる一連の政治劇を，あらたな社会分節の想像の資源として動員し，そのフィクショナルな分節を実際の日常生活のなかにもち込んで可視化し，演ずることをかれら自身が楽しんでいる，という点なのである．

前半で紹介した私のオジの立会演説会でのこと．閉会になった直後，フィールドの村に住むある青年が私のもとにやってきて，「お前はどっちにつくんだ」と問うた．彼自身はブッシュ候補を支持している．そのとき私は中立を気取って，「どちらでも」と答え，「そもそもおれには投票権がない」と言い添えた．場の熱気と緊張とにいささか興奮気味だったこの青年は，即座に興ざめ顔で吐き捨てるようにつぶやいた．「なんと役立たずなお前！」一瞬私はムッとしたが，彼の言葉は的を射ている．たしかに，ふだんはナココの息子やブッシュのオイとして振る舞いおおせているとしても，この状況のなかで，私はなんの意味もない存在だった．私は父ナココが，自分の支持する国会議員とは反対陣営に与する実弟ブッシュに投票したのかどうかは知らない．しかし，ブッシュの当選した晩，父は黙ってニワトリをつぶし，一家の夕食は賑わった．その後の県評議員選挙で，こんどは父の支持する陣営の候補が当選したのだが，その晩もまた父は黙ってニワトリをつぶした．われわれは選挙のおかげで，二度もおいしいスープにありつけることになったのだった．

---

# ボルネオの豊かな動物世界

加　藤　裕　美*

森の中を歩きつづけて2時間近くなる．周囲にはまったくひと気がなく，聞こえてく

るのは風の音，鳥の声だけである．ぬかるんだ道に足元を取られながら歩きつづけると，森はいっそう深くなり，ときおり木々の間から山々が望見されるようになった．「本当にこの先に村があるのだろか？」そんな不安に駆られながら，人の歩いた跡だけを頼りに，ひたすらいくつもの小川を越え，山を登り下りしていった．すると遠くから人の声や犬の鳴き声が聞こえてきた．徐々にそれらの声が大きくなると，にわかに森が開けて，集落が姿を現した．人の気配がまったく感じられない森の中から突如，集落が現れたときの驚きと安堵は今も忘れられない．私がフィールドワークをつづけている，マレーシア・サラワク州の熱帯雨林の中にある村にはじめていったときの思い出である．

サラワク州のあるボルネオは，生物多様性の宝庫であり，約200種の哺乳類，7,900種の植物が生息する熱帯雨林の島である．しかし，1970年代後半から盛んにおこなわれるようになった商業伐採により，森林面積の30%ほどが1985年までに消失した．現在では島内のほぼ全域に伐採道路網がはりめぐらされており，いたるところに伐採キャンプが開設されている．こうした状況の中で，ボルネオの人々と森林資源とのかかわり方は，ここ30年で大きく変化した．

私が調査をおこなっているのは，サラワク州中央部を流れる大河，ラジャン河を河口から船で10時間ほど遡ったところに暮らしているシハン Sihan とよばれる民族言語集団の村である．シハン人は全人口145人のマイノリティーである．もともと主食となるサゴヤシを求めて森の中を遊動していたが，1960年代に政府の政策によって定住し，現在では焼畑耕作をおこなうようになった．私はこの村で人々と森とのかかわり，特に森の動植物の利用を明らかにする目的で，これまでに13ヵ月の住み込み調査をおこなってきた．

**写真 1　集落への道**
木々の間から望見される山々．
集落はここから左手へ 2 km 先にある．

村での生活は朝が早い．まだ周囲が暗いうちに，鶏の鳴き声とともに目を覚ますと，まずコーヒーをいれてゆっくり飲み，ロング・ハウスの廊下にでて人々と昨夜おこなわれた狩猟の話などで歓談する．その後，ロング・ハウス内の居室を訪問しあい，噛みタバコを楽しんだり，情報交換をしたりする．そして，日差しが強くなると，女性は籐の採集や焼畑耕作地にでかけていく．他方，男性は猟銃の手入れや魚網の手入れをし，ころあいを

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

見はからって狩猟や漁撈にでかけていく．私は，こうした森の中でおこなわれるさまざまな活動に同行し，参与観察をおこなってきた．

森で人々が最も生き生きと活動するのは狩猟のときである．シハン人は，五感をフルに活用して動物と対峙する．動物を狩るときの彼らは敏捷で潑剌としている．シハン人に限らず，ほかの狩猟採集民もそうだろうが，彼らの足指は逞しく発達しており，足裏の皮膚は靴底のように分厚い．そのため尖った岩やトゲを踏んでも平気で，森の中を身軽に進んでいける．私はそんな彼らの後をいつも必死で追いかけていく．

マレー語で狩猟することはムンブル *memburu*（追う，狩る）と表現される．しかし，シハン語にはそうした動詞はなく，ケアップ *keap*（歩く）という言葉が使われる．これは，彼らが「狩りにいく」という直接的な表現を嫌うことの現れである．「狩りにいく」という言葉を聞いて，森の中の動物はどこかに逃げていってしまうと考えている．

彼らがおこなう狩猟の方法には，銃猟，吹き矢猟，槍猟，罠猟，そして鳥黐猟があるが，狩猟は聴覚と嗅覚を鋭敏に働かせながらおこなわれる．サルが木を揺らす音，イノシシが泥をあさる音など，動物がたてるさまざまな音に耳を澄ませ，時には草笛で動物をおびき寄せて動物に接近していく．また，彼らは，「動物の匂い」（*abun laut*）を敏感に嗅ぎ分け，獲物の種類や方向，大体の距離を察することもできる．どれほど懸命に匂いを嗅いでも，私には悲しいことにまったく何も感じられない．

獲物となる動物が見つかると，緊張と興奮は最高潮に達する．しかし，物音を立てずに，獲物が近づいてくるのをじっと待つ．そして銃を構え，引き金を引く．耳をつんざく銃声とともに地面に倒れこむ大きなイノシシやマレーグマ．しかし，時として銃弾は命中せず，逃げられてしまうこともある．そんなとき彼らは，まるで疾風のように傷手を負っているはずの獲物を追いかけていき，とどめをさす．こうして捕えられた動物は，樹皮を割いて作った紐で背負って集落まで持ち帰る．

「ごはんだよ！ごはんだよ！（*Kaman, kaman!*）」食事の支度ができると，それぞれの家から家族全員を呼び集める声がきこえてくる．外で遊んでいる子どもたちは家に戻り，そこらで世間話をしていた老人も帰ってくる．その場に他の家の人がいた場合は，もちろん食事に加わってもいい．しかし，たい

**写真 2　イノシシの寝床**
洞穴や土のくぼみはイノシシの寝床になる．
こうしたところでは待ち伏せ猟がおこなわれる．

ていは食器の準備がはじまると，皆そそくさと帰ってゆく．食事にかかる時間は10分程度であり，短時間のうちに済まされてしまう．しかし，そこで食べられる森の動植物は実に多様だ．13ヵ月の間に記録した動植物は 149 種にのぼった．

真夜中，熟睡しているとよく起こされることがある．狩猟にいっていた男たちが真夜中になってようやく獲物を持ち帰ったので，これから食事をするというのである．シハン社会における食事の特徴のひとつは，食事時刻の不規則性である．夜中の何時であれ，男たちが獲物を仕留めて帰ってくると，すぐに調理し，家族全員が起き出してきて食事をするのである．これは動物性の食物（*bao*）が食事の中で中心的な重要性をもっていることによる．つまり，森から動物性食物がもたらされることによってはじめて，食事がはじまるのである．そのため，飯や植物性の副食を料理し終わっても，食べられずに何時間も放置されることがよくあった．

夕食が終わると，老人たちはよくスケット（*suket*）とよばれる物語をしてくれる．スケットの中には一晩では語りきれないほどの長大な物語もある．

私はスケットを聞くのが好きだ．多くは動物世界の物語で，人々はタバコをふかし，タバコを噛みながら，老人の話に耳を傾ける．シハン人の集落には電気が来ていないので，夜は空き缶に灯心をたてた簡易ランプが唯一の明かりとなる．人々は，そのゆらめく灯火に照らされた部屋の中で，老人たちの幻想的な話に耳を傾ける．そして，老人たちの巧みな語りに，ハラハラ，ドキドキし，ときに大笑いをするのである．

**写真 3 仕留めた動物を背負うシハン人**
マレーグマのメスを仕留め，集落まで運ぶ青年．肉は食用として消費される．

そんな物語の主人公は人々にとって身近な動物である，イノシシやブタオザル，マメジカ，マレーグマなどである．物語の中で動物は擬人化され，人格をもってさまざまなドラマを展開する．たとえば，オスのマメジカが知恵比べでメスのナキジカに勝って結婚する話，気絶している少女がセイランの鳥の羽ばたきによって目を覚ます話，森の中で道に迷った女性がイノシシの後に付いていき村に帰還する話などである．物語の中の動物は，それぞれに個性をもち，人間を助け，人間に知恵を与えてくれる存在として語られる．

また，シハン社会にはトーテム動物が人間に力を与え，庇護してくれるという信仰もある．トーテム動物と良好な関係をもっていられると，吹き矢で狩猟をすれば百発百中だ

**写真 4　ロング・ハウスの廊下に座る老人**
ロング・ハウスの廊下ではさまざまな人が歓談をする．猟銃をもってきて見せる老人．

**写真 5　森の中で遊ぶ子どもたち**
長年森の中で暮らしてきたシハン人の知恵は子どもたちに受け継がれるのであろうか．

し，他民族との戦争の際には山刀で切られても負傷しない．また，超人的な運動能力を獲得し，高い岩を一気に跳びこすことが出来るようになるという．

個人のトーテム動物は夢見によって告げられる．そのために，トーテム動物は，おなじ家族でも個々人ごとに異なる．トーテム動物を食べることは厳禁であり，昔の人たちは，たくさんのトーテム動物にかかわる食物禁忌（*utam*）をもっていたために，好き勝手に動物を食べることはなかったといわれる．

このように，森の中の動物は狩猟の対象であるだけではなく，精神的に人々を支える存在でもある．食事や収入の調査をとおして，動物は食事における蛋白源としても，現金収入源としても，人々の生活を安定させる重要な役割を果たしていることが明らかになった．しかし，それだけでなく，動物は目に見えない精神世界においても彼らの生活を豊かにしてくれているのである．

現在，シハン人の狩猟活動は商業化しはじめており，イノシシなどの高く売れる動物だけが狩猟の対象にされる傾向がでてきている．また，学校教育が浸透し，町にある小学校に通うために，現在の子どもたちは，親の世代の者たちよりもはるかに森に入ったり，森に親しむことがなくなりつつある．この子たちが大きくなるころには，シハンを取り巻く環境も大きく変わっていくであろう．そのなかで，長年森の中で暮らしてきたシハン人の知恵は，どのような運命をたどるのだろうか．あるいは，忘れ去られていくのだろうか．今後もシハンの人々と森の動植物の関係をより深く理解できるように，研究を続けていきたいと思っている．

夕方，森の中を歩き疲れて帰ってくる頃，あたりは暗くなりかけている．急いで水浴びと洗濯をすませて村にもどり，真っ暗になる前に灯の用意をする．ロング・ハウスの軒先ではすでに老人たちがランプを灯し，歓談にふけっている．私は，彼らの傍らに座り，話

に耳を向けながら，よく軒先から足を放り出し，目の前に広がる森を眺める．「日本が恋しくなったのかい？」としばしば聞かれるが，そうではない．鳴きしきるさまざまな虫の声と刻々と色を変えていく森の姿は，実に神秘的で美しい．私は薄闇の中に悠然と広がる森を眺めながら，シハンの人々の腹を満たす森，人々が空想するユニークな動物が住む森，さまざまな森の姿に思いを馳せているのである．

---

# 「ゴリラはナイフを持っている」

## ―カメルーンの森から―

服　部　志　帆*

中央アフリカのコンゴ盆地一帯に広がる熱帯雨林（写真 1）には，「ピグミー」と呼ばれる狩猟採集民が暮らしています．「ピグミー」はゴンゴ（*ngongo*: *Megaphrynium macrostachyum* (Benth.) Milne-Redhead. クズウコン科）やボボコ（*boboko*: *Ataenidia conferta* (Benth.) Milne-Redhead. クズウコン科）と呼ばれる大きなウチワのような葉でできたドーム型の住居（写真 2）に暮らし，狩猟や採集，漁労を行なうという生活を送っています．高台から「ピグミー」の森を眺めてみると，青い空を背景に深緑色の世界がどこまでも広がっています．また，森の中に一歩足を踏み入れると，樹高が 40 m ほどにもなる巨木が薄暗い空間を作り出し，太陽の光はわずかに地上に届くくらいです．この森では，ゾウやゴリラなどの哺乳類や樹間を飛び交う色とりどりの鳥たち，大河にゆうゆうと身をゆだねる爬虫類，目もくらむほどの数で訪問者を圧倒する昆虫がその生を営んでいます．「ピグミー」はこのような動物たちを狩

**写真 1　アフリカ熱帯雨林（写真提供：木村大治）**
コンゴ盆地一帯に広がる熱帯雨林は，総面積が1億7千万haに及びます．この森は，多様な動植物とともに「ピグミー」の生活の舞台となってきました．こんもりとした緑のかたまりの下には，「ピグミー」のキャンプがちらばっており，このキャンプを基点に彼らは狩猟や採集，漁労へと出かけます．

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科